



『お金で買えないもの』

東京都
東京修道館
中学1年 嘉山 謙心

剣道を始めたのは、三才の時だった。父、祖母、叔父が剣道をしている環境だった為、道場に
通い始めた。最初は、道場に行っても、寝たり、泣いたりだった。

そんな僕を変えたのは、先生や先輩たちが、格好良く「防具」を着けている姿に憧れた事がきっ
かけだ。

「早く防具を着けたい。」

その一心で稽古に励んだ。先生や、先輩が着けている格好良い防具をたくさん打たせてもらい、
稽古した。

そして、ついに憧れの防具を着けることが認められた。すごくうれしかった。

「これで僕も格好良くなれる。」

と、思っていた。しかし、「小手」を着けたら竹刀を握れない、「面」を着けたら頭が痛い、全く
自由に動く事が出来なかった。

防具を着けた事によって、試合にも出場が出来るようになったが、全く勝つことが出来なかつ
た。悔しかった。僕は、勝ちたいが為にまた稽古に打ち込んだ。

そして、小学三年生の区大会、僕は人生初の決勝の舞台にまで立つことが出来た。結果は優勝。
一生懸命に稽古をした分、勝った時の喜びも大きかった。

この試合で僕は、日々の稽古の大切さを知り、又、剣道が好きになった。今まで、家庭の「環
境」だけで通っていた道場だったが、本気で剣道をしたい、という「自分の意志」で通うようにな
った。

学年が上がり、多くの試合に出場する様になり、他の選手を見る機会が多くなった。強い選手
は、礼儀作法もとてもしっかりしている事が印象に残った。

いつも、館長先生が何度も何度もおっしゃっている

「剣道は勝ち負けでなく、礼儀作法や、言葉遣いも、しっかりするものだ。」

と、という言葉思い出した。

一流の選手になるには、勝ち負けの「強さ」だけでなく、礼儀作法や、言葉遣い、挨拶などと
いう「品格」も大切だと気づき、常日頃からしっかりと心掛ける様になり始めた。

そんな矢先だった。僕の大好きだったおじいちゃんが亡くなった。いつも道場までの送り迎え
をしてくれたり、毎回試合の応援に来てくれて、欠かさずビデオ撮影をしてくれた。僕の事を支
え、一番に考えてくれる、とても優しいおじいちゃんだった。とても悲しく、胸が締め付けられ
るように痛くなった。

そんな精神的に辛かった僕を支えてくれたのは、一緒に稽古に打ち込む事の出来る仲間達の存
在だった。共に稽古した仲間と試合に出場し、勝つこともあった。少し自信がついて、前向きに
なれた。

そして、僕は心に決めた。

「天国にいるおじいちゃんに、成長した立派な剣士の姿を見せる。」

と。

その為に、剣道によって身に着ける礼儀作法や、言葉遣いなどの、剣士としての品格、大切な事を教えて下さる先生方、先輩方、共に頑張れる仲間が存在。

どれをとっても欠かせないものだ。

この、お金では絶対に買えないもの、大切な財産を、もっともっと増やし続ける為、日々稽古に励み、自分を磨き続けていく。